

# 先週の回答



いつものようにこの時間の小料理屋「お染」は、会社帰りのサラリーマンで混んでいる。  
昭和工業株式会社の文書課長万年波平は、部下の安楽泰平の差した杯の酒を飲み干すと、  
「きみとは平（へい）同士で気が合うねえ、ははは」とやや赤い顔で機嫌顔。  
「一顧傾城って何でしょうか？」と部下。「一顧は、流し目」と課長。  
「長嶋？あの元ジャイアンツの？」  
「長嶋は関係ない。流し目だ」  
「それが傾城？」  
「城を傾かせるんだ」  
「と、申しますと？」  
「ちよっと流し目に見るだけで人の心を乱したり、城を傾け滅ぼさせるに至る

妖艶な女という意味だ。チョー美人のことだ」  
「そんな女いますかねえ・・・？」  
「うちの会社にはいないが、世間にはいる」  
「うちの会社はどうして不細工ばかりなんですか？」  
「それだよ。会社始まって以来、女子社員はブスばかり」  
「なぜでしょうか？」  
「これの」と万年課長、親指を出す。  
「これが」とこんどは小指を立てる。  
「ものすごい嫉妬（やきもち）やき」  
「社長の奥さん・・・」と泰平、自分の鼻を押し上げて社長夫人の顔をつくる。  
「不細工に限って嫉妬深い」とうんざり顔で手酌する万年課長。  
「女好きの社長が手を出すから美人は

雇わない？」  
「そのとおり」  
「するとわたくしはこの会社にいる限り、美人と机を並べることは」  
「ない」  
「が、次の日、社長夫人が急死。会社挙げての社葬が終わって一段落したある日」。  
目の覚めるような、まさに一顧傾城美人が万年課長のデスクの前に立った。  
「新入社員の花園ヒロ子です」抜群のプロポジションではほえんだ。  
「うちの課に配属になるの？」  
「はい」  
「いつから！」  
「2035年からです」  
現在2015年。



# 今週の問題



□の中に漢字を埋めて  
四字熟語を完成させてください。